



5月26日(日)

時間: 10:00~16:00

会場: 天満橋学舎(100周年記念館)

対象 歯科医師・歯科技工士・歯科衛生士・学生

研修費 歯科医師(本学卒) 10,000円、歯科医師(他大学卒) 15,000円、
歯科技工士 8,000円、歯科衛生士 8,000円、学生 3,000円

1コース / [シンポジウム] 定員:250名

審美歯科治療の 最前線



内藤 正裕

日本歯科審美学会理事・評議委員
日本顎咬合学会指導医
トロント大学国際交流アドバイザー

略歴

1968年 日本大学歯学部卒業
1971年 東京都豊島区 内藤歯科開業
1974年 第1回渡米
南カリフォルニア大学
ポスト・グラデュエート・コース受講
1978年 東京都港区赤坂 内藤デンタルオフィス開設
スタディグループ「くれなゐ塾」設立
1990年 東京都西麻布に移転
5ヶ月コース「くれなゐ塾」主宰
2002年 神奈川歯科大学 客員教授

審美と咬合 - 判りかけた事と、判っていない事 -

「咬合」には数多くの変数(Variable)がある。まず、系統発生と個体発生
の要素に分けられる骨格の問題がある。次に、骨格にかなり支配されて
筋肉の要素があり、それはトレーニングによっても左右される。その他の
変数に、食事習慣、咀嚼癖、歩行、呼吸、発音、運動などの個々の習癖が
挙げられる。

次にカリエスと歯周病のタイプがあり、その結果の歯列や欠損が無数の
変数となって分類される。天然歯列では生体の許容力と、各組織のゆっ
くりしたりモデリングによって、多少の変数は吸収されてしまう。しかし、
歯科医が修復を加える場合、変数の加算が唐突に起こる事が多く、問題
が生じやすい。

修復治療は便宜上、人工的な素材を使用せざるを得ず、これも大きな変
数となる。当然、天然歯質とは耐磨耗硬度、脆性、被圧変位量などが異な
る。時代の流れと共に少しでも審美性の高い素材が求められるが、メー
カーの宿命である「より強く、より硬く」なった素材が、人工的な大きな
変数となって咀嚼系を変えてしまう恐れが生じる。

様々な理由によって欠損が生じるが、そのリペアの大変大きな手持ちの
カードとなったのがインプラントであろう。我々の臨床では非常に有効な
手段であるが、新しい解決法は常に新しい別の問題点を引き連れて登場
する。結果としてインプラントは極端に大きい変数になってしまう。それは
歯根相当部、歯冠相当部、上部構造体などの組み合わせと、咬合との絡み
合いがほとんど未知の変数によって構成されるからであろう。

今回は数多くの変数の中からオーバーロードをピックアップし、天然歯の
受ける被害、メタル修復に発生する現象、セラミックの問題点などを浮き
彫りにしてみたい。

その問題点がインプラント修復ではもっと急拡大され、上部構造の破
折、スクリューのダメージ、フィクスチャーの破損、歯槽骨の吸収などを引
き起こす。歯列全体の变化とフィクスチャーのバランスが同調せず、オー
ペンコンタクトが多発するであろう。

まだ我々の咬合に関する考え方と、技術、素材は完成の域からは程遠い。
インプラントの応用拡大がそのギャップをより大きくする現在、少なくとも
も判っていない事だけは先生方と共有しておきたい。



本多 正明

S.J.C.D.国際ナショナル副会長
大阪S.J.C.D.最高顧問
日本顎咬合学会指導医
日本臨床歯周病学会指導医
O.J.ファウンダー
日本歯科審美学会理事・評議委員
日本補綴学会会員

略歴

1970年 大阪歯科大学卒業
1973年 日本歯学センター勤務
1978年 日本歯学センター退職
1978年 東大阪市にて本多歯科医院開設
1972年より2003年
Dr.Raymond Kim(南カリフォルニア大学)に師事

歯科治療における機能美

近年、補綴臨床において脚光を浴びているトピックスとしては、審美
歯科やインプラント治療が挙げられる。審美修復においては、セラ
ミックレストレーション、コンポジットレジン修復等の技術の向上と
目覚ましい材料の開発により、素晴らしい結果が誌上や講演会でみ
ることができる。インプラント補綴では、あたかも歯根があるような
治療がなされてきている。特に、審美性への関心から前歯部に目が
向いているようだ。そこでこれらの治療が、良好な“Longevity”を得
るために、今一度、補綴治療の原点を見直す必要がある。

日常臨床において、90パーセント以上が機能回復のために補綴治
療を必要としている。しかしながら、補綴歯の予後はどうであらう
か。日常、遭遇する問題の多くは、以前に治療を施された補綴歯が多
いようである。この原因の1部は、患者側にあるかもしれないが、
我々術者側の診断および、技術的なところにもあると考える。

今回は機能を回復するにあたって、咬合を実践的にどのように考え
れば良いか。また、機能美について補綴物形態と歯の位置からも考
察したい。



林 直樹

略歴

1993年 大阪歯科大学付属歯科技工士専門学校卒業
株式会社ナショナルデンタルラボラトリー入社
2001年 WORLD LAB U.S.A. 入社
2001年 早稲田歯科技工トレーニングセンター
非常勤講師就任
2001年 ノリタケデンタルサプライ、CO.
公認国際インストラクター認定(現:技術顧問)
2003年 DBA: Ultimate Styles Dental Laboratory
開設
世界各国多数講演、ワークショップ、論文掲載

Invisible Beauty

歯科治療は結果が全てである。結果が良好であるならば、そこに辿
り着く行程はどのようなものであっても概ね正しいと言う事ができ
るかもしれない。

今日まで約13年間に渡り、米国の審美歯科に携わってきた。その
中で自身が肌で感じたものの多くは、どの様な治療方針・形式であ
れ、その中心には必ず患者がいるという事である。

米国と日本の歯科事情に差異があることは事実だが、しかし共通す
る部分も多くあると私は思う。いずれにせよ、ひと一人の患者に対し、
満足における治療結果を出すという最終到達点に変わりはない。

また2013年の歯科補綴治療において、それが審美的でない事はも
はや許されない。これまでにあったMicroの観点からのみではな
く、Macroの観点までを十二分に考慮し、患者の術後結果に対し
多くの要因を満たさなくてはならない事もまた大きな事実である。こ
の2点においては、そのどちらが重要であるかということではなく、
どちらも最優先事項であることに違いはない。

患者を中心に展開する、多くの治療オプションや術式が混在する現
在の審美歯科治療において、私たちがどのようなゴールを見据え、そ
して導き出していくのか。いくつかのケースのビハインドを交えなが
ら紹介し、来場された皆様と共有できる機会となれば幸いに思う。